
Christmas in Australia

おじい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Christmas in Australia

【Nコード】

N3010D

【作者名】

おじい

【あらすじ】

この作品は「いちにちひとつぶ」の番外編です。高校生、宮下優成と仙石原末砂記がオーストラリアで過ごしたハートフル(?)でフィーリングなクリスマスの物語です。

1 宮下優成の場合

これは高校一年生、みやしたすけなり宮下優成がオーストラリアで過ごしたクリスマスの記録だ。

俺たちは学校の希望者をのみが参加する研修旅行でオーストラリアへ発つことになった。

オーストラリアの十二月は夏。俺たちはホームステイ形式で真夏のクリスマスを体感する。

ホームステイは二人一組で、俺は同じクラスの三条太郎と共に生活することになった。かつては女子と組んでも良かったらしいが、いつからか、何やら事情があつて、いや、情事があつてダメになったらしい。

今日はクリスマス。ケアンズ市内の店は殆どが休業。

ケアンズ

オーストラリア北部に位置する。地名はケアンズという人名に由来。俺たちはホストマザーと一緒にクリスマスパーティーの会場に来ていた。

そこには市民がに集結してオーストラリア国内の歌手によるクリスマスソングのコンサートを聞いたり、みんなで食事や乾杯をしたりして聖なる夜を盛大に祝うのだ。

「宮下あ、こんなの日本じゃ有り得ねえよなあ」

「ああ、こんな普通の町でこんなに人が集まって、みんなでクリスマスを祝う…」

俺と太郎は、この土地を訪れてから、カルチャーショックの連続だ。会場には人がいっぱい集まっていて、好きな料理をバイキング形式でいただきながらコンサートや各々のトークを楽しむ。

ギュッ！

！？

「おつす宮下あ！」

「うわ…」

「何その反応！？　こんな異国の地で運命の再会じゃん！！」

「急に背後から抱き着くな」

コイツは中学の時に同じクラスで、同じ高校に進学した仙石原末砂^{せたいはくみ}だ。俺は無駄に騒がしいコイツが苦手だが、しかし友達だ。悪い奴ではない。

「周りをよく見なよ！ こっちでは知ってる人と会った時、抱き着くのは普通だよ？」

「ああ、まあな。それと運命の再会って、学校出発する時から一緒だろが」

確かに、周りのオーストラリアの人たちは会うとすぐに抱き合う。

再会を喜んだり、素直に感情を表現出来たり、そんな事が普通に出て来る国の人々、自然環境だって素晴らしい。こんなの日本じゃほぼ有り得ない。というより、日本はその面に於いては悪い意味で特異な国だろう。

「おお、オタちゃん！」

「ああ、三条君」

また新たにメンバーが会場にやってきた。オタちゃんは中学の時から友達で、鉄道ファン。三条とは鉄道研究部の仲間だ。俺の周りには何故か電車が好きな人が多い。

「Ladys and gentleman!!..... Mer
ry Christmas!!」

「Merry Christmas!!」

司会者の掛け声と共にパーティーが始まった。

「よし！！ 歌うぞオタちゃん！」

「うん！ せいのっ！」

「クツハモハモハサツロ サツロサハサハモツハ モツハ
クハクハモツハ モツハサハクツハ 」

オタちゃんと三条が肩を組み何やら歌い出した。

「ここならバレないよなあオタちゃん！！」

「うん！！ 言いたい放題だね！！」

何なんだ？ 何が言いたい放題なんだ？ ってゆうか何の歌！？
まあいつか。今日はクリスマス！ 細かい事は気にしない！

「なあ仙石原あ、周りのオーストラリア人はよくこんなに英語ペラ
ペラ喋れるなあ」

「宮下もそう思った！？ そうだよね、凄いよね！ カッコイイね
え！！！」

英語ペラペラで当たり前な事くらい分かっている。でも何だか凄か
った。

コンサートを聞いてると気分がボ～ツとしてきて、幻想的な世界に
連れて来られた気分になった。

「ねえ、せっかくだから食べまくらうよ！！」

「ああ、そうだな」

ホストマザーは仲間と英語で会話。三条とオタちゃんは電車の話。

周囲の人たちの会話についていけなくなった俺は、仙石原と食事をすることに。

「そういえば仙石原は誰と組んでるん？」

「ヒタッチだよ。でもヒタッチ英語ペラペラでホストマザーの仲間と喋ってて、最初は私も混じろうとしたんだけど居づらくなっちゃって」

「ああ、正に今の俺の状況と同じだ」

俺がそう言つと彼女は共感を覚えたのか微笑した。こうして見ると結構可愛い。

「そつか！　じゃあ残りもの同士盛り上がるっ！」

「ああ、せつかくの真夏のクリスマスだ。今日くらいはお前に付き合うよ」

「じゃあ乾杯っ！！」

「乾杯っ！」

「ねえ、宮下ってどんな女の子が好きなの？」

またその話か。中学の時からずっと同じ質問してくるんだよなあ。

「あゝあ、うゝん、一緒に居たいと思った人」

ベタな言い訳で逃げた。

「そうだよね！ 私もそう思う！」

あら、共感された。

「ねえ宮下あ、この国の人達って、羨ましいと思わない？」

「ああ、俺もそう思う」

会場には笑い声と歌声が響き、歡喜に溢れた空気に包まれている。みんな何を気遣う訳でもなく、心の底からこの聖なる夜の夢のような時間を楽しんでいる。これこそパーティーと呼ぶに相応しい。

クリスマスって、こんなに楽しいのか：

今この場が楽しいのは雰囲気のせいだけじゃない。むしろ俺にとってこの雰囲気は苦手な筈だ。それはみんなが盛り上がっている中、口数少ない俺は独り取り残されるような気分になるからだ。今日この場だってホストマザーや三条とオタちゃんの話についていけなく

なつて孤独感がある。

では何故楽しい？

「むやすたあ、せつかくだからむおつと食べよお」

「口に物含みながら喋るな」

下品な女だ。

「Sugunari Tarō? Go back home!
(優成、太郎、帰るわよ)」

「オーケー。じゃあ俺、帰るわ」

「うん。今日はありがとね！ 宮下のおかげで一人にならなくて済んだよ！」

そっか、そういう事か。

ようやく気付いた。今日楽しかったのは苦手な筈のコイツが居たからだ。付き合ってたやっていたつもりが、逆に自分が付き合ってたっていたのか？

「いや、俺の方こそ。今日は仙石原が居て良かった」

「へへへえ、照れるなあ。じゃあまたクリスマス一緒にやろうね！」

「ああ、そうだな」

アド交換をしたが、時間が経てば学校でクラスが離れている彼女は、きつとまた俺にとって苦手な存在になってしまう。彼女は特別進学科の3組、俺は機械科の20組。離れ過ぎだ。まあ四月になれば他の科へ移動出来る制度はあるのだが。

本当はそれよりも、今のままの仲が続けば本望だ。カノジヨ持ちの身で、異性に対して仲良くしようなど言えない。いや、カノジヨが居る事を言い訳にしている。

でもきつと、コイツとならまたいつか親しくなれる時が来る。

そんな気がする。

「宮下あ」

「ん？」

彼女は俺に微笑みながら言った。

「メリークリスマス」

俺は一瞬フリーズした。

「メリー、クリスマス」

「いちにちひとつぶ」第一話に続く。

2 仙石原末砂記の場合（前書き）

一話目と同じ日、同じ場所での出来事を末砂記の目線で描いています。

2 仙石原末砂記の場合

私は神奈川県湘南の高校に通う高校一年生、仙石原末砂記です！今は学校の研修旅行でオーストラリアのケアンズにきています！なんと今年は真夏のクリスマスを体感しちゃいますよーお！！

ここはクリスマスパーティーの会場。市民のみんなが集まってコンサートを聴いたりお食事をしながらホーリーナイト（聖なる夜）を祝うんです！今日はホストマザーたちとパーティーに同席させてもらうことに。食べまくりの予感がしてきました！

「末砂記い、食べ過ぎちゃダメだよ？」

親切に私に忠告してくれたのは小さい時からずっと一緒の女友達、おおみかひたち大甕浸地ちゃん、通称ヒタッチです！

「まあまあ今日くらいいいじゃない！それにしても凄いなあ。周りの人達は英語ペラペラだよ！」

「当たり前だよ。英語圏なんだから」

「でもあんなに達者に喋られると圧倒されない？」

「そうだね。じゃあ私も混じってみる！」

あーっ！！ヒタッチ英語ペラペラだあー！！ダメだ。私、孤立した！！スタンドアローンだ！！まずい、まずいですぞーお？せっかく

オーストラリアに来たのにクリスマスの夜を無口で過ごす？マジ有り得ねえべ？

そうだ！おんなじ学校の人に来てるかもしれないからさがしてみよう！

あつ！早速みつけた！

よし、ここはオーストラリアだし、後ろから抱き着いちゃえ！

ギュッ！！

「おつす宮下あ！」

「うわ…」

「何その反応！？こんな異国の地で運命の再会じゃん！！」

「急に背後から抱き着くな」

私が抱き着いたのは中学の時に同じクラスで同じ高校に進学した宮下優成。したくなり中学の時はキノコ頭でダサイ髪型だったけど、今は髪型変えて少しイケメンになったみたい。実は彼、私の片想いの相手なんです！でも彼は私の事が苦手みたい。もっと近付いて、名前で呼び合ったりしてみたいなあ…

「周りをよく見なよ！こっちでは知ってる人と会った時、抱き着くのは普通だよ？」

「ああ、まあな。それと運命の再会って、学校出発する時から一緒だろが」

きつと彼も私みたいに孤立しちゃったんだ。これはチャンス！？一歩でも近付くぞお！！

「なあ仙石原あ？周りのオーストラリア人はよくこんなに英語ベラベラ喋れるなあ」

「凄いね！カッコイイねえ！！」

うそっ！？私と同じ事考えてんじゃん！！あゝ、なんかヤバいかも…この会場の雰囲気とコンサートが私のハートを麻痺させてる…メロメロだよお…宮下あ、私の気持ち気付いてよお…

でも、きつと告白したらあつさりフラれちゃうんだろうな。ならこのままの方がいいや。

とりあえず、折角二人になれたから一緒に食事しよう！

「ねえ、せつかくだから食べまろうよ！！」

「ああ、そうだな」

こんな些細な事がきつと、一生心に残る思い出になる。この恋が例え実らなくても、きつと美しい思い出になる。

諦める気なんかないけどね！

「そついえば仙石原は誰と組んでるん？」

「ヒタッチだよ。でもヒタッチ英語ペラペラでホストマザーの仲間と喋ってて、最初は私も混じろうとしたんだけど居づらくなっちゃって…」

「ああ、正に今の俺の状況だ」

「そつか！じゃあ残りもの同士盛り上がるっ！」

「ああ、せつかくの真夏のクリスマスだ。今日くらいはお前に付き合うよ」

「じゃあ乾杯っ！！」

「乾杯っ！」

「ねえ、宮下ってどんな女の子が好きなの？」

自分とは違うタイプの子が好きなのは分かってる。けど、つい聞いてしまう。

「あゝあ、ううん、一緒に居たいと思った人」

えっ！？意外！大人しい人とか清楚で奥床しいとか言うと思ったのに。でも、ベタだけどのを射た答えた。

「そつだよね！私もそつ思う！」

「ねえ宮下あ？なんかこの国の人達って、羨ましい」

「ああ、俺もそう思う」

この国の人達は、仲間との再会を喜び、純粹にパーティーを楽しんでいる。クリスマスの価値観も日本とは大分違う。私は何より、日本人みために柵しがらみのない、この国のピュアなハートに憧れた。

私は食にも生活にも困らない貧しい国に生まれたんだ…

「むやすたあ、せつかくだからむおつと食べよあ」

「口に物含みながら喋るな」

「Sugunari Taro? Go back home!」

優成、太郎、帰るわよ」

宮下たちのホストマザーが呼び掛けた。

「オーケー。じゃあ俺、帰るわ」

帰っちゃうのかあ…細い糸を引き切られる様で切なくなってきた。でも楽しかった。彼が居てくれたお陰で今までで一番楽しいクリスマスになった。

「うん。今日はありがとね！宮下のおかげで一人にならなくて済んだよ！」

そもそも私が彼を好きになったのには、こんなプロセスがある。

私は中学生の頃、彼にこう尋ねた。

「ねえ宮下あ、私の事、どう思う?」

やっぱり一瞬困った顔をした。でも直ぐに答えてくれた。

「友達つて、思っていていいかな?」

私は持ち前の明るさで、誰とでも直ぐに喋れる。でも本当に友達と呼べる人は少ない。だから彼の、その控え目な言葉が素直に嬉しかった。むしろそれはこっちの台詞。こんなうるさい私で良ければ、是非友達になって下さい!

それから私は彼に興味を持つようになり、次第に恋へと変わっていった。

「いや、俺の方こそ。今日は仙石原が居て良かった」

へっ!? 私が居て良かった!? 彼から私に対してそんな言葉が聞けるなんて有り得ないと思ってた。あの時、私の事を友達だと思ってくれていたのは本当だったんだ。それをやっと確信出来た。私はその言葉を聞くと同時に自ずと笑みが零れた。

「へへへええ、照れるなあ。じゃあまたクリスマス一緒にやろうね!」

「ああ、そうだな」

今日はクリスマス！定番の台詞をまだ言っていなかった事に気がき、
別れ際に彼を引き止めた。

「宮下あ」

「ん？」

「メリークリスマス」

彼はあの時のような困った顔で、そしてやはり直ぐ返事をした。

「メリー、クリスマス」

やっぱり諦められないや。いつか、絶対に告白しよう。私はそう心に誓った。

「いちにちひとつぶ」第一話に続く。

2 仙石原末砂記の場合（後書き）

クリスマスという事で、こんな企画をやってみました（^^；

短い話でしたが何か感じ取っていただけるものはありましたでしょうか。

それではMerry Christmas!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3010d/>

Christmas in Australia

2010年10月8日12時13分発行